責任編集　G・H・コックス

アメリカ探偵作家クラ

探偵作家クラブ傑作選

●責任編集G.H.コックス
●井上一夫訳

2

東京創元社

MWA. 2

定価 260 円

アメリカ探偵作家クラブ
傑　作　選 2

編　者　G・H・コックス
訳　者　井　上　一　夫

発行者　小　林　茂
東京都新宿区新小川町 1 —16
印刷所　日放印刷株式会社
東京都品川区西大崎3—540
発行所　東　京　創　元　社
東京都新宿区新小川町 1 —16
電　話 (331) 8511—5
振　替　東京　1 5 6 5

昭和36年 8 月30日　初版

はしがき

この短編集、つまりアメリカ探偵作家クラブ後援による、その会員の作品から選んだミステリーならびに探偵短編の年度作品集第五巻の眼目は、ヴァラエティということにある。このヴァラエティの当面する中心問題は、主人公の立場や努力の方向の多様性ということで、そういう点からわれわれは、主人公たる探偵を本職の探偵からセミ・プロ、さらにアマチュアから初心者までずらりとそろえてみた。

こういうヴァラエティをねらうと、いつでもそうであるが、作品のすべてが読者に喜ばれるというわけにはいかない——推理小説の鬼は別であるが。推理小説をいつも読んでいる人、ときどき読む人、あるいはたまには読んでみようという人——そういう人には、この本はかなりの価値を認められるだろうが、「推理小説なぞ読まん」と、頭ごなしにいい切ってしまうような人たち——これは意地をはってるのか負けおしみなのか、私にはどちらとも判断がつかないのだが——そういう人たちには、この本はあまり魅力はないであろう。

このいう好みの問題ということになると、当然それはクラブの編集委員会と出版社との間にも問題はあった。具体的にいうと、作品は百三十本集まって、そのうち九十五パーセントは、すでに発表されたのも

当然と思われるだけの値うちのある作品だった。そのうち編集委員の三人が予選会議をやって三十七本を選んだが、そのなかの二十本を出版社に無条件で推薦したのに、あとの十七本は三人の意見が一致しなかった。ここにいたって、問題は出版社のほうに移った。これまでの作品集でも最後の決定は出版社がもっていたからである。長さとか、登場人物や背景、テーマの類似というものも、選択の前に考慮されなければならない。とくに、値うちが同じぐらいの作品の場合はそうで、そういうことはよくあるのだが、とくにこの作品集の場合にはこっちをとろうというような妥協もあった。

目次をひと目見れば、どんな煮えきらない読者でも納得するだろう。目次にある名は、当代一流の、昔からおなじみの名まえが多い。それに、そうでない作者も、この作品のサンプルを見れば、将来それに劣らぬようになることは確信がもてるだろう。たしかにチャンドラーとスタウト、クイーン、ギルバートなどが一堂に会している短編集は、だれでも読んで損はないだろう。

前巻までと同様、この巻の出版権も、各作品はその作家が無料で提供しているのだった。作家たちはそれぞれ、自衛のため、よそに寄稿すれば原稿料が最初に発表したときより高いことが多いのをよく知っていて、こういう場合の許可は財産を動かすものだと、堅く知りつくしている。それなのに今日、「私の作品はどれを？」という作家の声がよく聞こえるのである。報酬のことを考えず、信ずるクラブのために作品集に喜んで寄稿してくれるということは心強いことである。

この一巻を作るための山のような作品の処理を主にやったのは、三人の委員たちだった。この作品集の目的と限界をたえず念頭におき、全作品を読んで下選びをしたのである。ここで、誠実によくこの仕事をしてくださったドロシー・ガーディナー、ドロシー・ソールスバリ・デイヴィス、さらにウィル・オース

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ラーの助手を使って協力されたクレイトン・ロースンの三氏にお礼を申しあげておこう。とくにミス・ガーディナーは、それ以外に、手紙による連絡を主として引きうけてくださった。それにしても、何よりもクラブとして深い感謝をすべきは、暇と手数をいとわず、この選集の発行を可能にしてくれた百三十の原稿を送ってくれた会員諸氏にである。

B・W・I・バーバドス

ジョージ・ハーマン・コックス

目　次

はしがき／ジョージ・ハーマン・コックス
住所変更／ロバート・アーサー……三
おれは待ってるぜ／レイモンド・チャンドラー……一五
手　口／マイクル・ギルバート……四一
家のなかの殺人犯／ベン・ベンスン……五七
裏切り者／スタンリー・エリン……七三
シリア叔母／ブルーノ・フィッシャー……九九
検察側証人／Q・パトリック……一二七
天外消失／クレイトン・ロースン……一四九

刑事のプレゼント／レックス・スタウト……一八三
魔法の余地なし／モーリス・プロクター……一九一
金髪の看護婦／トマス・ウォルシュ……二〇五
犯罪博物館の謎／スチュアート・パーマー……二三一
ゲッティスバーグのラッパ／エラリー・クイーン……二五五
コーヒー茶碗／リリアン・ド・ラ・トール……二八三
訳者あとがき……三一一

ブラック

傑作選

2

住所変更

ロバート・アーサー

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

神経の狂った人間がいるのと同じに、狂った家というのもある。ときには、ぽつんと見すてられた家が、ちょうど楽しい思い出をたよりに、静かな威厳をもって老いさらばえてゆく人間のように、生きのびていることもある。しかもときには、そういう家は、醜くねじけた邪悪の考えをいだくのだ。もちろん、樹木の考えと同じ、はるか意識の下のものにはすぎないのだが、それにしても、ある人間の心の琴線にふれようとすることはある。わたしも一度そういう家に住んだことがあったし、その家はわたしに、その家が果てしない時間の冥想で得たものを、わたしにささやきかけようとしたものである。わたしはあわててその家から逃げだしたが、その冥想の成果はわたしから離れない。そこで、それにのっとって、わたしはこの作品「住所変更」を書いたのである。

「あの家、人殺しに打ってつけというぐらいしか、とりえはありませんよ」ホリンズ夫人ははっきりいった。だいたいが、はっきりした女なのだった。

ホリンズ氏のほうは、目に陽気な光をたたえた小男で、笑っていた。

「ジョカスタ、おまえさんはあんまり本を読みすぎたんだよ。まったく、いい家らしいよ。もちろん、少しは手もいれなければならないさ。さもなければ、いまどき空いてる家があるものかね。そうでしょ、スマイリーさん？」

ポート・オロの周旋屋のスマイリー氏は、パチンと指を鳴らした。

「そうなんですよ。その家だって、ちゃんと最善の状態になったら、とっくの昔に借り手がついてますよ」
よごれた南京下見のその二階家が、修理が必要なことは否定できなかった。屋根にも緑のこけがしみになっているし、玄関のポーチはいまにも崩れそうだった。ホリンズ夫人は、そういうことをならべあげた。
「こまかいことだよ、そんなことは」ホリンズ氏はいった。「崖の間にちんとおさまってるところを見てごらん！　正面の海のひろびろしてるところを見てごらん！　あの太平洋の波が押しよせてくるところ――どぶーん、どぶーん、どぶーんとな！　海の匂いをかいでごらん！」
彼は深く息を吸いこんだ。
「新鮮な空気、閑静さ！　カリフォルニアのこの陽気！　どうだ、わたしはもう生まれかわったみたいな気分だよ」
背が高くてごつごつしたからだつきのホリンズ夫人は、鼻をくんくんいわせた。
「あんたの新鮮な空気というのが、この死んだ魚みたいな匂いのことをいうなら、わたしも同感ですけどね。崖といえば、あの崖は日当たりをさえぎって、一日になん時間というぐらいしか日が当たりませんよ。それにこの海――わたしは太平洋って青いとばかり思ってましたけどねえ。こんな灰色とは思いませんでしたよ。それに、この海岸だって――」
しかし、小男のホリンズ氏は、周旋屋のあとにちょこちょこついていってしまった。
「決心する前に、なかを見よう」彼は大声でいった。「スマイリーさん、ここには炉があるといってましたね？」
スマイリー氏は、彼らにその炉を見せた。しっかりした炉で、ちょっと錆びていたが、これは地下室の土の床から上る、ある程度の湿気のせいだった。
「この界隈の二十軒で、炉のある家はここだけですよ」スマイリー氏はもったいをつけていった。「この家のりっぱな呼び物ですね。寒波がきても、ちょっと火をつければ、ぬくぬくとあったかく暮らせるんです。それに、この湿気をとりたかったら、なんでもありません。床をセメントで固めれば、それだけでいいんです」

「もちろんそうだ！　セメントの床ね。そのとおりだ。それで万事解決だ。ところで、二階を見よう、どうだい、おまえ？　もっとも、自分でこの家が気にいるということは、もうわかっているがね――とても気にいった」

スマイリー氏は、さらに輪をかけた楽天家なので、夫婦にその家のほかの部分も案内してみせた。

「どうだい、奥さんや？」家を見おわると、ホリンズ氏はいった。「悪くないな。全然悪くない。部屋の大きさも、いたって手ごろだし、台所はかなりモダンだ。配管もちゃんといってるし、床もきしまん。ペンキを塗りかえて、ちょっと磨きこめば、気持ちがよくなるな。まったく、ささやかな愛の巣というとこだ」彼はうれしさのあまり、ちょっとダンスのステップを踏んだくらいである。「スマイリーさん、借りることにしますよ。借りましょう」

「わたしにも相談したっていいでしょうに」ホリンズ夫人はいった。「わたしもここに住まなきゃならなくなりそうなんですからね。ほかに空いているところがなければ――」

「だって、あるわけがないよ」ホリンズ氏が大声でいった。「ありますか、スマイリーさん？　カリフォルニアのこのあたりで、ほかに空いてる家があるわけがない」

「このお家賃ではありませんな」スマイリー氏が調子にのって声をはげましていった。「奥さん、このお家賃ではめっけものですよ。掘り出し物ですわ。もちろん、月に二百ドルか、それとも三百ドルぐらいお出しになるなら――」

「とんでもない、とんでもないこったよ、まったく」ホリンズ氏は節をつけていった。「ところで、どうだね、この家は買ってもいいんだろ」

「買っても？」スマイリー氏は首をふった。「ホリンズさん、売り物じゃないんですよ。持ち主が売りたがらないんです。いまはシアトルに住んでるかたですがね。金物を扱う商売をやってたかたで、ウィルスンってかたです。四、五年前、保養のためにここにいらして――ちょうど、お宅みたいにね。この家を買って越してこられたんです。ところが、そのうちにそのかたは、奥さんと別れちまいましてね。喧嘩別れで、奥さんはテキサスの姉さんとかのところへいってしまったんです」

「テキサス？」ホリンズ氏は歌うようにいった。「いいところだ、テキサスは。広くて、荒削りな感じでね。しかし、カリフォルニアとはくらべものにはならん。それで、その人は売ろうとはしないのかね？」

「奥さんが思いなおして、帰ってくるかもしれないというんですよ」スマイリー氏はいった。「そのときのために、この家はとっておきたいというんです。甘い話ですがね。しかし、この前手紙で問い合わせてみたときから、あのかたも気持ちが変わってるかもしれませんよ。もう一度、どうだか問い合わせてみてもいいですよ」

「たのむよ」ホリンズ氏は食い下がった。「たのみますよ、スマイリーさん。それに、向こうがなんというか、返事を聞かしてもらいたいな。それまでは、ここは借りることにしよう。いいね、ジョカスタ？　明日引っ越してきて、ここでふたりで新生活をはじめるんだ。タララ、タララ！」

ホリンズ夫人は、夫のほうをじろりとながめた。

「フィラデルフィアを出てから、あんたのすることは、とても変ですよ」くんくんと鼻を鳴らせて、「ひょっとしたらアンドリュー、例のあのタイピストの小娘が――」

「タイピスト？」ホリンズ氏はびっくりしたような顔をしていった。「どこのタイピストだ？　ああ、あの金髪の小娘のことをいってるのか――いや、赤毛だったかな？　あの子を首にしたときは、とても泣いていたぞ。あの子はどうなったかなあ！　そう、早まったことでもしないでくれればいいと思うよ、ほんとうに」

ホリンズ夫人は、口もとを引きしめた。

「いいですよ、半年ですよ」彼女はいった。「カリフォルニアで半年間暮らすという約束をしたんだから――半年たったら、フィラデルフィアへ帰るんですよ。それに、スマイリーさん、ここの持ち主に、この家を売ってくれるかなんて、聞いてやらなくてもけっこうですよ。わたしたちがここで暮らすのは、半年こっきりで、それ以上は一分も延ばしませんからね」

「そのうちにわかるよ、おまえ。そのうちにわかるさ」ホリンズ氏は陽気に請け合った。「おまえもそのうちに気が変わるさ、請け合ってもいいよ。あの波の音を聞いてごら

ん。ちょっと聞いてごらんよ、ザブーン、ドドド、ザブーン、ドドド！　それに、陽気が寒くなってきたら、暖をとるためには暖炉があるんだよ」

夫妻は翌日引っ越してきた。しかし、ホリンズ夫人にとって、季節はずれの曇り空ばかりつづくカリフォルニアの陽気も、この家自体も、なじみがわいてこないのだった。がっちりした作りの家ではあったが、湿気が多いことは否めないのだった。

「アンドリュー、あんたがあんなに自慢してた、例の暖炉をつけなければだめね」二、三日たったある晩、だしぬけに彼女はいった。「冷えてきたわ。こんな家に住んでたら、ふたりとも死んじまうわ。きっとそうよ」

「わたしは、いたって快適なようだがねえ」新聞のかげから、ホリンズ氏は答えた。「だが、そのほうが気持ちがいいというなら、ちょっと火をいれようかね。そういわれてみると、ちっとばかりだが、しめっぽいようだ」

「しめっぽいなんてもんじゃありませんよ」ホリンズ夫人は陰気くさくいった。「この家には、どっか具合の悪いところがあるんですよ。夜、眠れないで横になってると、わたしにはそれが感じられる。わたしたちにはわからない何かがあるんですよ」

「ほらほら」ホリンズ氏は地下室に行こうと立ち上がりながら、陽気にいった。「そら思いすごしちゃいけないよ。しばらくその推理小説を読むのをやめたほうがいいな」

地下室におりると、ホリンズ氏は火を起こしにかかった。すぐに暖炉は陽気なうなりをあげる。何か考えこむように、しばらく彼は陽気な赤い火口をのぞきこんでいた。それから、地下室を歩きまわって、ぼんやりと爪先で土の床を蹴る。しばらく考えていたが、シャベルをとってくると、炉のうしろの隅に、かなり大きな穴を掘りはじめた。穴は役に立った。とくに、地下室の水気をそこにすっかり吸いよせてくれる。ジョカスタが、夫は何をしてるのかと、上から声をかけてたずねるまで、彼は穴掘りをつづけた。呼ばれてからは、シャベルを片づけ、まくり上げた袖をおろして、部屋に上がっていって新聞のつづきを読む。

翌日、やっと太陽が顔を出した。ところが、おかしなことに、太陽も暖かい陽気も、この家の雰囲気を変えてはくれない。少なくともホリンズ夫人にとってはそうだった。

「あなた」彼女は翌日の晩も、またいった。「わたし、この家はいやですよ。引っ越ししなければ」

「だっておまえ、契約書に署名しちまったんだよ」ホリンズ氏は、野球のニュースを熱心にながめながらつぶやいた。「六カ月の契約だ」

「それはなんとかなりますよ。わたしが方法は見つけるから、まかしてちょうだい。契約は解除できるわ。口実を見つけるから。わたし、この家の持ち主だというウィルスンさんの奥さんに手紙を出して、この家の歴史を聞こうと思ってるくらいですよ。きっと、この家には何か信じられないようなことがあるのよ。もちろん、向こうからそんな話はしやしないでしょうけどね。もし私の思うとおりだったら、契約を取り消すいい口実になるわ……その奥さんというのは、いまテキサスにいってると、周旋屋の人がいってたでしょう?」

そこで彼女は、書き物机のほうにいった。

翌日の午後、ホリンズ氏は車で村に行き、スマイリー氏のところに家主から何かいってきているかとたずねた。

「もうくるころですがねえ」スマイリー氏はもみ手をしていった。「もうきますよ。あの家が、お気に召したようですね?」

「わたしの神経は、もうだいぶよくなった」ホリンズ氏はいった。「だが、家内はあのヴィラ・ヴィスタがあまり気にいらんようでね。フィラデルフィアに帰ると、いつもわたしをおどかしてる」

「気にいらないと、町じゅうにいってまわってらっしゃる」スマイリー氏もいった。「けさもここに見えて、家主の奥さんのウィルスン夫人のところを教えろといってました」彼は首をふると、「女の人ってのはね!」という。

ホリンズ氏もうなずいて、たがいに笑顔を浮かべた。

次の朝、ホリンズ氏は、自分で掘った排水孔を見に、地下室へおりていった。ちょっと考えてから、穴をもう少し深くする。掘りおわると、妻に見におりてくるよう声をか

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com